

「僕はは「っ」を伝えるために／田中昂佑さん（20歳）

「死にたい。」

中学2年生の時ずっと思っていた。

引越して転校したばかりの僕は、新しい環境で学ぶことにとてもわくわくしていた。転校先での新しい学校生活はどれほど楽しいのだろう、と希望にあふれていた。

ところが転校して間もなく、僕はすぐに不良に目をつけられた。理由はわからない。それから2年間暴力や暴言などのいじめを受けた。周りの人たちは、僕に近くと自分も巻き込まれると思ったのか、誰も僕を助けてはくれなかった。常に孤独で、友達と呼べる人はいなかった。いつしかネットで「楽に死ぬる方法」を検索しては、いつ死ぬか考えていた。実際は、死ぬことが怖くて、せめて自分の存在を証明するために犯罪の道に逸れて、家族や周りの人たちに迷惑をかけていた。

わかってはいても、自分が生きている事を証明するためにはその方法しかわからず、何度も同じ過ちを犯していた。

ある日、生活指導で担任の先生に呼ばれた。先生は僕の悪行には触れずに、あることを提案してきた。

「1年間保育園のボランティアをしてみないか？」

子供はあまり好きではなかったし、最初は断っていた。ところが、放課後不良に殴られるくらいなら、と先生の提案を受け入れることにした。

そうすることで、放課後彼らと会う機会も減り、殴られることもないと思ったからだ。

そして、保育園ボランティア初日。100人の園児がいる保育園へ向かった。

ボランティアの内容は「子供たちと遊ぶこと」だった。

最初は子供と鬼ごっこなんて疲れるし、やんちゃな子供は砂を投げてきて挑発してくる。

ストレス以外のなにものでもなかった。ところが、ボランティアに通うにつれて、無邪気に笑う子供たちやいつも将来の夢について語る子供たちに次第に惹かれるようになっていった。

「僕はウルトラマンになる！」

そんな純粋な夢を語る子供たちの姿に自然と元気をもらっていた。
「なんで死にたいなんて言ってるんだらう」
いつしか子供たちの笑顔や姿に勇気をもらっていた。

保育園ボランティアを始めて半年ほど経ったある日、担任の先生と面談があった。
いじめられるのが怖くてサボり気味だった僕に先生はたった一言こう言った。

「明日の授業には必ず来なさい」

担任は英語担当で、英語嫌いだった僕は全然行きたくはなかったけど、保育園も含め先生のおかげで何度も救われたこともあり、その日だけは行くことにした。

先生の授業が始まった。「We Are The World」のドキュメント映像を見る内容だった。当時ちょうどマイケルジャクソンが亡くなり、マイケルジャクソンの話題で世間が持ち切りだったから、この曲を教材にするのだと思っていた。

衝撃だった。世界にはこれほど苦しんでいる子供たちがいるのだ。

特にアフリカの地域は飢餓や内戦がひどく多くの子供たちが苦しんでいた。僕も通っている保育園児たちが無邪気に笑っている一方で、他の国々では生きたくても生きられない現実には涙がこぼれた。

僕はインターネットで「世界の内戦で苦しんでいる子供」を検索した。すると、ベトナム戦争で苦しんでいる子供の写真を何枚も見つけた。枯葉剤という化学兵器

によって体が變形して生まれてくる子供たちの姿が映し出され、言葉にならなかつた。しかもその化学兵器は日本が作ったものだということに。この時、「日本人としてこの子たちを救わなければならない」という使命感のようなものが僕の中に芽生えた。

その日から僕は変わった。彼らを救うには意志疎通が欠かせない。ベトナム語を学ばなければならない。僕はベトナム語を学べる高校を調べ受験した。合格した日に、僕は高校3年間ベトナム語を学ぶと決意をした。幸運なことに当時、ベトナム語を学んでいる学生は僕を含め3名しかいなかった。おかげで、ベトナム人の先生とマンツーマンで授業を受けることができた。

高校2年生になり、ベトナムの高校に2週間単身短期留学をする機会を得た。そこでは、現地の高校生と、ベトナム語や日本語の学習に加え、ベトナム戦争について話し合うディスカッションの時間など貴重な経験をすることができた。しかし、ベトナム戦争で苦しむ方々と会うことはできなかった。

そこで、ベトナムの貧困地に行き、そこで暮らす子供たちと話す計画を立てた。そこに住む子供たちは何を考えているのか。日本の子供たちとどう違うのか、興味があったからだ。

貧困地域は想像を超えていた。僕が通っている保育園児と同じくらいの子供たちが物を売ったり、ゴミから使える物を拾ったりしている。それも一人二人ではない。何十人もいるのだ。そしてその子たちに笑顔はない。

「学校は？」と聞くと、「お金がないからいけないの。だからこれ買って。」希望がない瞳で物を売る子供に本当にショックを受けた。僕はひたすら考えた。この子たちに何ができるのかを。

それが世界共通のダンスであった。中学の担任の先生から「We Are The World」を教えていたから、マイケルジャクソンの歌声や世界平和のメッセージに影響を受けた僕は、密かにマイケルジャクソンのダンスを練習していたのだ。翌日、市場で安いスピーカーを買い、再びその地域に行った。そして子供たちの前に立ち、音楽を流し、マイケルジャクソンのダンスを披露した。すると、子供たちは、「僕たちにも教えて！」と目をキラキラさせながら寄ってきた。

僕は「あれほど目に希望がなかった子供たちがこんなに輝いている！」と思うと嬉しくなり、子供たちにダンスを教えることにした。気づいたら50人は超える子供たちに囲まれていた。

「僕のダンスでこんなに子供たちが笑顔にすることができた」

もともとずっと世界中の苦しんでいる子供たちの笑顔を僕のダンスで増やしていきたい。

帰国し、高校3年生になった僕は進路について考えた。大学ではベトナム語を学習できる場所はもちろん、国際的な環境で平和学を学びたいと考え、立命館アジア太平洋大学という大学に進学した。そこには80カ国を超える留学生がおり、宗教や人種問題、貧困などの平和学や開発学の方野について深く学べると思い入学することを決めた。

大学1年生になり、ベトナムで学んだことや感じたことを実践した。多くの子供たちの笑顔を増やすために、日本各地をはじめ、フィリピンのスラム街、タイの貧困地域、カンボジアの孤児院（海外NGO）、インドのマザーハウス、ケニアのスラム街を訪れ、たくさんの子供たちとダンス交流を行った。そして思った通り、多くの子供たちの笑顔を観ることができ、とても嬉しかった。そんな時、僕の人生を再び変える衝撃的な事件が起こった。

昨年2月（2014年）、僕はケニアに1カ月半滞在した。ケニアを選んだ理由は、「We Are The World」でアフリカの飢餓を知ったからだ。アフリカの貧困地帯をこの目で見たい。この人たちのために何かしたい。と考えるようになったからだ。ケニアのキラベスラムというスラム街はアフリカで2番目に大きく、安全とは言え

ない場所だった。僕は「子供たちが笑顔になれば、世界は平和になる」そんな風に考えていたがそこは他の国と明らかに違っていた。僕の想像を遥かに超えた貧困だった。

町は殺風景で、そこで暮らす人々の目は狼のように鋭かった。危険を感じた僕は、すぐにナイロビの中心地に移動した。そしてそこで僕はある事件に巻き込まれた。「無差別殺人事件」だ。

お金を両替する目的でナイロビのビルを訪れた僕を、警備員はボディチェックした。そしてその警備員に、「どこから来たの？」と質問され、「日本だよ」というと、「日本か！日本大好きだよ、僕たちは友達だね」と言つて僕に手をかざした。ハイタッチして笑顔で挨拶し、僕は建物の中に入った。するとその直後、銃声が6発鳴り響き、大騒ぎになった。僕は頭が真っ白になり、無我夢中で建物を駆け上がった。その時「死にたくない」と心から思った。

あれだけ「死にたい」と思っていた僕が、初めて「死にたくない」と感じた瞬間だった。

そしてその後、僕は深い悲しみに陥ることになる。

ニュース速報で「無差別殺人事件、死者2名」と流された。その死者の中に先ほどハイタッチした警備員の写真が映し出された。

言葉も出なかつた。受け入れられない現実がそこにあつた。そして、想像した。もし僕が少し後にそこにいたら、死んでいたのは僕かもしれない。怖くなった。明日何が起こるかわからない。今生きていることが「奇跡」なんだ。この事件をきっかけにして、より世界平和とは何かを追求するようになった。そして、自分の経験を多くの人に伝えるべきだと感じるようになった。

この経験を通して、今までに約10カ国の国を訪れ、平和へのメッセージを込めて、マイケルジャクソンのパフォーマンスを行っている。彼は世界平和を常に訴えている。エンターテイナーであり、彼のダンスは国境も世代も超えた世界共通言語だと思うからだ。

旅をして気づいた。僕たちはみんな同じだということ。ただ生まれた場所が違うだけ。世界中のあらゆる問題を解決できる可能性はまだたくさんある。平和という言葉には多種多様な意味が込められているが、この多種多様な意味を持つ平和について、旅を通して追及し、彼らに何ができるのかを深く考え、自分にできる最大限のことをしていきたい。

僕を助けてくれた人がいるように、僕もその誰かになりたい。死にたいと思っていた僕に生きる希望を与えてくれた先生のように。世界で苦しんでいる子供たちの存在を教え、そのために行動すべきだと教えてくれたマイケルジャクソンのように。いつも迷惑をかけていたのに見捨てなかった両親のように。僕は彼らの家族になりたい。

犯罪でしか生きる希望を持ってない子供たちに。

世界の紛争、飢餓で苦しんでいる子供たちに。

両親のいない子供たちに。

僕は伝えたい。

「僕たちは家族だよ。君は一人じゃない」

このメッセージを伝えるために僕は旅に出る。